国 語 科 授 業 案

日　時　平成２９年　１月２７日（金）４校時
生　徒　１年Ｃ組　男子１８名　女子１７名
授業者　太　田　　諭
授業場　１年Ｃ組教室

１　単元名「事実」・「意見」・「図表」の関係を読む　～中心教材「言葉のゆれを考える」～

２　単元の目標

「事実」と「意見」と「図表」との関係性に着目して「言葉のゆれを考える」を読み,「ら抜き言葉」の是非についての自分の意見を文章に書くという言語活動を通して，説明的文章の構成や展開，表現の仕方などについて自分の意見を持つと同時に,筆者のものの見方や考え方について,自分の考えを持つことができるようにする。また，それらに着目して説明的文章を読もうとする態度を培う。

（中心となる指導事項エ・オ　関わる言語活動例イ）

３　単元について

（１）　単元観

「国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」によると,国語科において,「実生活で生きて働き,各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」「我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てること」が重要であるとされた。これは,現行学習指導要領の趣旨と変わるところではない。しかし,新たに重要とされたのは,「言葉による見方・考え方」を働かせ,３本の柱からなる国語に関する資質・能力を育成することである。「言葉による見方・考え方」とは,「自分の思いや考えを深めるため,対象と言葉,言葉と言葉の関係を,言葉の意味,働き,使い方等に着目して捉え,その関係性を問い直して意味づけること」とされている。よって,これからはそうした目的意識と思考のプロセスを意識した授業の構築がこれまで以上に求められることになる。

こうした要請を踏まえたとき,「言葉による見方・考え方」を働かせる上でのベースともいえる「論理的思考」をいかにして鍛えるかが重要になると考える。この「論理的思考」の形成に深く関わるといえるのが,「説明的文章」を用いた学習であろう。なぜなら,「説明的文章」そのものが純粋に論理を媒介とした表現であるため,それを読み,自らの考えを深めるためには,論理を介したインプット・アウトプットが頻繁に行われる必要があるからである。

本単元の中心教材となる「言葉のゆれを考える」は,現在ゆれているとされる言葉のうち,「ら抜き言葉」について述べられた論説文である。意識調査の結果から,「音数の少ない語ほどら抜き言葉が用いられやすいこと」,「年齢が低いほどら抜き言葉が用いられやすいこと」を挙げ,「ら抜き言葉を変な言い方だと思う人がほぼ半数いる」という現状から,「改まった場面では使うのを避けるのが望ましい」と結論付けている。話題として身近な「言葉」を取り上げているばかりでなく,「図表」「事実」「意見」が明確である点も特徴であるといえる。よって,社会的要請及びこのような特徴を有効に用いて単元化を図る必要がある。

（２）　目指す児童・生徒像

これらの状況から,本単元における目指す自律性が育まれた姿を,「課題について,適切な根拠を持ち,それに基づいて判断し,適切に表現（記述）する姿」とする。

（３） 指導観

以上のことから, 本単元においては, 次の点に留意して指導にあたることとする。

「認識から思考へ」「思考から表現へ」のプロセスを重視した言語活動の工夫

① 単元を見通すことができる言語活動と一単位時間の言語活動を有機的に結びつける～Ⅰ

まず, 本単元における「単元を貫く言語活動」として, 日常的な言葉遣いに関する「ら抜き言葉の是非」についての意見をもち, 意見文を書くこととする。これは, 生徒にとって身近な話題であり,「言葉そのもの」に関わるものでもあるため, 学びの必要感が生み出されることを期待している。また, 毎時間, 様々な対話を通して,「ら抜き言葉の是非」いついて判断するために根拠を蓄積し, その都度判断する場を設定する。このことによって, 言語活動が有機的に結びつくと考える。

② ねらいとする「見方・考え方」を働かせる核となる「文章・表現」への着目を促す教師の関わり～Ⅱ

本単元では, 資料となる図表と本文とを切り離して提示することとする。このことにより, 図表・事実・意見の関係について, 先入観抜きで捉えることが可能になるであろう。また, 図表から読み取れる事実の表現が人によって変わりうるということにも気づくことができるはずである。さらに, 本文については, 一部空欄にして提示する。そのことによって, 主述のねじれ等に気づくとともに, 筆者の説明を理解できたかどうかがチェックできるようにする。

本単元における「見方・考え方」と「対話的な学び」との関係性

本単元における「言葉による見方・考え方」は,一つには,「事実」・「意見」・「図表」の関係性についてのものであり,もう一つは「ら抜き言葉の是非」という言葉に対する考え方が対象である。現状において生徒は,図表から読み取れる事実の表現方法に多様性があることを自覚化できていないと考えられる。また,意見によって,事実の捉え方や表現方法も異なることに対しても,自覚化できていないと考える。それらのことが自覚化できるようにするのが本単元における「対話的な学び」である。表現方法の多様性は,級友との比較によって自覚化できるはずである。また,事実の捉え方や表現方法が多様であることも,級友との比較や,先哲との比較によって明らかになるであろう。それがなされれば,今後の生徒の言語生活が豊かなものになるはずである。また,「ら抜き言葉」についての認識が深まることにより,今後の言語意識も高まることが期待できる。

4　評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	言語に関する知識・理解
ア　現状の知識・資料・対話を通して,課題に対する自分の考えを深めようとする。	ア　本文における「図表」「事実」「意見」の関係について,自分の考えを持ち,音声・文字で表現している。 イ　筆者のものの見方・考え方に対して,自分の考えを持ち,文字で表現している。	ア　「事実の表現」は「意見」によって変わり得ることを説明することができる。

5　学びの過程のデザイン

下支えする主体的な学び	学　習　活　動	手　立　て
日常的な言葉の使い方に関わる課題を提示することにより,必要感を持ち自分の考えが表現できるようにする。	**1 時間目【本時】** 「ら抜き言葉」の是非に対する自分の現状認識とその根拠を表現する。 関 ア	「ら抜き言葉」は変ないい方か,という二項対立的な課題を提示することにより,他者の考えと比較する必要感を生み出す。
客観的なデータが,意見の裏付けになること・図表からわかる事実の表現方法が人によって異なることを知ることにより,事実・意見・表現方法の結びつきに気づくようにする。	「ら抜き言葉」についての調査結果の図表からわかる事実を言葉に変換することにより,客観的な認識を知る。また,自分の当初の認識を深めると同時に,事実の表現方法に多様性があることを知る。 読ア・言ア	図表からわかる事実を,数値を表さずに言葉で表現させることによって,認識の違いを生じさせ,協働の必要感を生み出す。
前時における自分の意見を確認することで,個の確立を促す。	**2 時間目** 「ら抜き言葉」に対する論説文を読むことにより,先哲である筆者の認識と自分の認識との違いに気づき,自分の認識をさらに深める。また,筆者の事実・意見の表現方法を捉える 読ア・言ア	同テーマの文章であることから,先哲との対話により,その考えを知る必要感を生み出す。また,同じ図表を用い筆者の論説を読む際に,一部空欄にすることにより,筆者と自分とを認識の違いに気づき,認識を深めることができるようにする。
図表からわかる事実の表現方法が人によって異なることを知ることにより,自分の意見と表現方法の結びつきに気づくようにする。		
前時の手立てに同じ	**3 時間目** 図表と事実と意見との関係性についての見方・考え方を働かせて「ら抜き言葉」に対する,深まった認識を文章化する。 読 イ	交流を前提とすることにより,表現の必要感を生み出す。また,書くことによる自己内対話を促す。
書くことによる自己内対話により認識が深まるようにする。		
前時の手立てに同じ	**4 時間目** 見方・考え方を働かせ,級友の書いた文章を読み,評価することにより,さらに認識を深める。 関ア・読ア	級友の考えとの対話により,認識を深めるようにする。
当初の現状認識と比較し,認識の違いを明らかにすることにより,見方・考え方の深化を自覚するよう促す。		

６　本時について（１／４時間目）

（１）　本時の目標

「ら抜き言葉は変な言い方か」という課題について,調査結果の図表を読み,読み取れる事実を言葉に置き換えることによって,事実の表現方法が多様であることに気づき,新たな表現方法を用いて自分の意見を再構成することができる。

（２）　本時における研究の視点

・「ら抜き言葉の是非」についての意見を持つ　手だてⅠ

・図表と本文を切り離して提示する　手だてⅡ

（３）本時の展開（〇発問, △補助発問, □指示・説明）

学習活動 （下位目標）	主な働きかけ	【評価方法】 個に応じた指導
「ら抜き言葉」は変な言い方か,根拠に基づいて判断し,意見文を書こう。		
1「ら抜き言葉」の是非について,現段階で自分の中にある根拠に基づいて判断し,次のように記述することができる。 ・**自分が使っているので**変な言い方ではない。 ・**周りも使っているので**変な言い方ではない。 ・**本来的な使い方とはいえないので**変な言い方である。**友人はどのように考えているのだろう。**	〇「ら抜き言葉は,変な言い方なのだろうか。なぜそう言えるのか。」手だてⅠ Ａ－①	【関ア】・ワークシート
図表と言葉の関係を考える。図表からわかる事実は何か？		
2「ら抜き言葉」についての調査結果データ「図５」から,「事実」としてわかることを次のように記述することができる。 ・ほぼ半々である。　・変な言い方でないと考えている人の方が多い。 ・変な言い方だと考えている人の方が少ない。　**友人はどのように記述したのだろう。**	〇この図からわかる事実は何だろう。数字を使わずに表してみよう。手だてⅡ	【読ア】・ワークシート
3 記述した事柄を発表することができる。 4「図１～図４」から「事実」としてわかることを次のように記述することができる。 図１　ら抜き言葉を使わない人の方が多い。ら抜き言葉を使う人の方が少ない。 図２　ほぼ半々である。ら抜き言葉を使う人の方が多い。 図３　ら抜き言葉を使わない人の方が多い。ら抜き言葉を使う人の方が少ない。 図１～３を通して,音数が少ない方が,ら抜き言葉を使う人が多い 図４　年齢が若い方が,ら抜き言葉を使う人が多くなる。年齢が高いほど,ら抜き言葉を使わない。 **友人はどのように記述したのだろう。**	〇どのような言葉になりましたか。 〇では,次のそれぞれの図からわかる事実は何だろう。また,合わせるとわかる事実は何だろう。手だてⅡ	【読ア】・ワークシート

５班員と比較して,事実の表現が異なることに気づき,指摘することができる。 **同じデータを見ているのに、いろいろな書き方がある。**	○班のみんなはどのように書いているだろう。班の人と同じ言葉でしたか。	【読ア】・観察
６図２・図１～３からわかった事実の表現を交流することによって、言葉に変換するときには,自分の先入観や意見が入り得るということを指摘することができる。 **・自分の意見が書き方に影響を与えているのではないか。** **・先入観が書き方に影響を与えているのではないか。**	○図２からわかった事実をどのように書きましたか。 ○図１～３全体からわかった事実をどのように書きましたか。 ○同じデータなのに,書き方が異なるのはなぜだろう。	【言ア】・ワークシート・発言
７データからわかる事実を根拠に加えることで自分の意見を再構成し,記述することができる。 **・ほぼ半数の人が変ではないと考えているので**変な言い方である。ない。 **・変な言い方ではないと考えている人の方が多いので、**変な言い方ではない。など	□では,今回のデータを根拠に加えて,あらためて「ら抜き言葉の是非」について判断してみよう。 Ａ－②	【関ア】・ワークシート

～本文～

言葉のゆれを考える　　三井はるみ

「同じくらい」と「同じぐらい」、「空揚げ」と「唐揚げ」、「ご利用くださいまして」と「ご利用いただきまして」……。意味は同じなのに、語形の一部や発音、書き表し方が違うこのような言葉の違いを「言葉のゆれ」といいます。言葉のゆれの多くは、以前からあった言い方と、新しく生まれて広がりつつある言い方が、一つの時代に共存しているものです。ゆれている言葉があると、どちらを使えばいいか迷うこともあるかもしれません。そのようなとき、多くの人たちの言葉の使い方や考え方を調査によって知ることが、一つの手がかりになります。

ある調査から抜粋した例をもとに考えてみます。

おいしいからたくさん　a　食べられる
　　b　食べれる

「食べられる」も「食べれる」も、どちらも「食べることができる」という意味を表します。「食べられる」は以前からある言い方で、動詞「食べる」に「そうすることができる」という意味を表す「られる」が接続した形です。「食べれる」は比較的新しい言い方で、「食べられる」から「ら」を抜いた形をしているため、「ら抜き言葉」といわれています。「られる」は、「そうすることができる」のほ

か、「ほかのものからそうされる」「尊敬する」という意味や、「自然にそうなる」という意味も表します。一方、「ら抜き言葉」は、「そうすることができる」という意味だけを表します。このように意味がはっきりする便利さもあって、現在広まりつつある言い方ですが、規範的ではないとされています。

それでは、「ら抜き言葉」の使われ方は、どのようになっているのでしょうか。

次のページの図１は、全国の十六歳以上の人約二千人に、元来の言い方である「食べられない」と、「ら抜き言葉」の「食べれない」のどちらを使うかを尋ねた結果です。「食べられない」を使うと答えた人が六〇・二％、「食べれない」が（三五・二）％、「どちらも使う」が（四・〇）％で、「食べられない」が（多数）派であることがわかります。「ら抜き言葉」を使うと答えた人は、全体の約（四）割です。

ただし、「ら抜き言葉」が使われる程度は、動詞によって異なります。図２は「見られた」か「見れた」か、図３は「考えられない」か「考えれない」かを尋ねた結果です。「見れた」を使うと答えた人は（四七・二）％で、「食べれない」を使う人より（一二）％多く、逆に、「考えれない」を使うという人は八・一％と、非常に少なくなっています。「考える」「食べる」「見る」の順で、「ら抜き言葉」を使うという人の割合が（増え）ているわけです。「考える」のような音数の（多い）動詞よりも、「見る」のような（少ない）動詞のほうが、「ら抜き言葉」が使われやすい傾向があると考えられます。

次に、使う人の年齢による違いを見てみましょう。図４は、図１の内容を年代別のグラフにしたものです。「食べれない」を使うと答えた人の割合は、いちばん若い十六〜十九歳の年齢層で最も高く、（五八・八）％と過半数に上っています。一方、上の年代になるに従って「食べれない」の使用の割合は減少し、「食べられない」が増加しています。「ら抜き言葉」は比較的新しい言い方であるために、若い人のほうがより多く使用すると考えられます。

それでは、「ら抜き言葉」は人々からどのように捉えられているのでしょうか。図５は、別の調査からの抜粋で、全国の二十歳以上の人約千二百人に、「食べれない」という言い方を変な言い方だと思うかどうかを尋ねた結果です。「変な言い方だと思う」が（四七）％、「そうは思わない」が（五三）％と、意見はほぼ半々に分かれています。

こうして見ると、「ら抜き言葉」は、概して、言葉としては音の数の（少ない）動詞、人としては（若い）人たちを中心に使用が広がっているようです。一方、この言い方に違和感をもつ人も少なくありません。特に、改まった場や目上の人と話すときには、「ら抜き言葉」を避けるほうが望ましいと考えられます。